

日本年中行事選集 第一回

室町時代以降から昭和戦後期までに刊行された年中行事の貴重書を、歴史資料編、地域民俗編、寺社行事・祭礼編の三部構成で復刻。

年中行事は日本の文化・歴史研究にとって重要課題の一つであり、本書は民俗学、歴史学、宗教学、神道学、仏教学、地理学などさまざまな分野にとって有益な研究資料となるであろう。

小川直之 編・解説

第一巻 歴史資料編

定価 16,500 円 (税別) ISBN978-4-86670-006-9

第二巻 地域民俗編 (1)

定価 19,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-007-6

第三巻 地域民俗編 (2)

定価 16,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-008-3

第四巻 寺社行事・祭礼編 (1)

定価 18,000 円 (税別) ISBN978-4-86670-009-0

第五巻 寺社行事・祭礼編 (2)

定価 18,500 円 (税別) ISBN978-4-86670-010-6

全五巻 揃定価 88,000 円 (税別)
ISBN978-4-86670-011-3

クレス出版



『日本年中行事選集』第一回の構成と刊行

國學院大學教授 小川直之

現在では一般的な用語になっている「年中行事」は、平安時代には恒例の朝儀、つまり毎年繰り返される朝廷の儀式を言ったもので、具体的には仁和元年（八八五）に藤原基経が献じた「年中行事御障子文」が古い例である。藤原師輔による「九条年中行事」、藤原実資の「小野宮年中行事」もこの時代のもので、おそらく諸儀式が公事として整えられるなかで、その執行にはこうした記録が必要になったと考えられる。鎌倉時代にも、成立年代・撰者とも不詳だが、平安時代の恒例の朝議に和漢の文献や記録から関連事項の引用などを書き加えて注釈も意図した「年中行事秘抄」などがある。その後、室町時代になると「年中行事」は公事以外にも使われ、その使用が拡がり、江戸時代には、たとえば元禄十年（一六九七）に板行された菊本賀保の『国花万葉集』には「年中行事 町城之儀式」「惣年中行事」が収められ、庶民層の恒例行事にも「年中行事」の用語が使われている。

もちろん一年の恒例行事には、「年中行事」以外の語も使われているが、要は平安時代中期以降、さまざまな目的をもって一年の行事が記されるようになったといえる。このように古くから記されてきた年中行事書のうち、おおむね室町時代以降、昭和戦後期までのものから複製が必要なものを選び「日本年中行事選集」第一回として次のように三部にわけて構成した。

①足利將軍家や大友家という室町時代の武家の年中行事、江戸時代に記された朝廷の年中行事の規範書、そして江戸時代に民間に行われている年中行事の来歴や意味について和漢の文献・記録をもとに説明を加えた解釈書から選んだ歴史資料編。

②列島各地の庶民生活のなかで継承されている年中行事は、地域文化の個性を示すものとして日本文化研究に欠かせない分野であり、これは民俗学によって現在までに膨大な情報（資料）集積が行われ、出版されてきた。こうした書冊から選んだ地域民俗編。

③年中行事には、家ごとに行われるもののほかに、寺社の儀礼や祭祀・法会として齋行されるものもある。これに関してもとくに江戸時代以降には多くの記録や書冊が作成され、関心が高かったことがわかるが、昭和の戦中・戦後の出版のなかから選んだ寺社行事・祭祀編。

年中行事は日本の文化・歴史研究にとって重要課題の一つであり、民俗学や歴史学、宗教学、神道学、仏教学、地理学などさまざまな分野にとつて有益な書冊を選んだ。今回の選集以外にも年中行事研究に必要な書冊は多く、これに続く「日本年中行事選集」第二回では、明治期から昭和戦後期に出版された年中行事の解説書のうち複製が必要なものを選んで構成する予定である。